平成２７年３月２７日（金）西日本新聞筑豊版３０面

定年退職の大学教員がエール

ちくほう 教・育・学

四つの大学・短期大がある筑豊地区は、多くの研究者が集う人材豊かな地域でもある。だが、「大学の先生」とはどんな人たちなのか、市民が知る機会は少ない。今月末で定年退職する九州工業大と近畿大（いずれも飯塚市）の2人を訪ね、研究内容や学生へのメッセージを聞いた。（中島早貴）

九州工業大教授 田中和博さん（63）

知識に基づく知恵必要

オートマチック車のアクセルを踏むと自動でギアチェンジするが、かつては車種によって内部の機器が振動して歯車がかみ合わなくなり停車することがあった。この原因を突き止める研究を2008年に始めた。2年半、必死で研究したが、失敗続きで諦めかけた。

卒業研究に苦悩する学部生が考えた数式がヒントになった。「目に留まったとき、体中の血が頭に上った」。研究は軌道に乗り、12年ごろ、ついに解明。今では自動車メーカーの設計に生かされている。

長崎県大村市出身。世界初の海上空港である長崎空港建設の陣頭指揮を執った県職員のおじに憧れ、ダムや道路をつくる土木の仕事を夢見た。だが大学で、難解すぎて土木工学を諦めると、大嫌いだった物理の道に引き込まれたという。「まさか物理学者になるなんて。人生はどうなるか分からない」と笑う。

最近の学生はおとなしいと感じる。「学校で知識を得ても、社会で必要なのは知識からひねり出す知恵。失敗を重ねないとひねり出し方は身につかない。『とりあえずやってみよう』という柔軟性を持ってほしい」とエールを送る。

「50歳を過ぎて仕事が面白くなった。まだまだやりたいことがたくさんある」。退官後も嘱託教員として九工大に残り、技術開発に携わるという。

（流体工学）